学会が発足して 2 年が経過し，会員も 500 名を超え，投稿論文も増えてきました．これまで，毎号 4 論文を掲載していましたが，今号は，以下に紹介する 5 論文を掲載しました．

「日本語の終助詞の機能 — 「よ」「ね」「な」を中心として—」(中川，小野) は，「よ」「ね」「な」などの用法の違いを記憶モデルにより説明しています．「おいしいね」「おいしくないよ」などと言ったりしますが，このような違いをどのように扱うか，言語理解にとって問題です．従来，幾つかの研究が報告されていますが，本論文は，例えば，「よ」は文の表す命題が話者の記憶階層のある領域に発話以前に存在することを示すなどとして，「よ」の用法を説明します．

「ネットニュースグループ fj.wanted のダイジェスト自動生成」(佐藤，佐藤) は，インターネット上のニュース記事 fj.wanted から内容を端的に示す記事カテゴリと要約を自動抽出して，多くの記事の中から見たい記事を探しやすくするシステムについて述べています．プログラムは記事の表層的な特徴により記事カテゴリと要約を抽出します．例えば，「譲ってください」という記事カテゴリのもとに「タイプライターを探しています」といった簡単な要約が抽出されます．

「国文学研究とコンピュータ – 電子本「漱石と倫敦」考を作る」(安永) は計算機による文学研究について述べています．国文学研究では，対象テキスト，文献リストなどの種々の資料が用いられます．論文は，これら資料を計算機に格納し，それらを利用するツールを用意し，研究に資することを提案して，漱石の「倫敦塔」を題材にした実践を報告しています．この実践により作られた電子本は「倫敦塔」を読みながら関連情報が参照できるマルチメディアになっています．

「順接複文における主語の共参照関係の分析」(中川) は，従節と主節が「ので」「から」により接続される文において，従節と主節の主語が一致する場合，しない場合を分析しています．週刊誌と小説の文を対象に，従節と主節の述語の意味素性と主語の一致・不一致との関係を調べています．日本語では，主語が陽に表現されないことが多く，主語の同定が言語理解，機械翻訳などで問題です．本論文の分析は，そのような問題に対する手掛かりを与えるものといえます．

「構文付きコーパスの作成と類似用例検索システムへの応用」(兵藤，河田，応，池田) は，コーパスの用例に係り受け構造を付与しておいて，類似用例の検索精度を上げる方法を述べています．用例には，文節カテゴリ，意味分類コード，係り受け構造と，多くの情報を付与し，不適切な用例が検索されないようにします．係り受け構造は，表層情報をたよりに部分的には曖昧さを残し，自動的に求めます．和英辞典を対象に，係り受け構造の付与と用例検索の実験が試みられています．

島津　明 (NTT 基礎研究所)